

～ セピア色の風景 ～

「昔の盆踊り」

青田 茂雄

仙台建設業協会専務理事

昔の話です。盆踊りは、ま
さにお盆真つ最中の一夜、村
の神社の境内で行われていま
した。夕方、遠くから聞こえ
るお囃子に、気もそぞろに
なったのを覚えています。

神社に行く途中に、母の実
家がありました。兄弟や母と
実家に寄り、そこから叔父さ
んたちに連れられて盆踊りに
行き、その後母の実家に戻り
帰宅するのが恒例でした。

記憶のある最も昔の風景
は、夜道を照らす手元の明か
りが提灯だったことです。途
中見える明かりは、小売店の
広告灯一つという暗闇でし
た。また行く時に歩いた記憶
はありますが、帰りの記憶は
なく気付いたときは自宅でし
た。出掛ける時母は常に、太
いおんぶ帯を持っていました
から、それでおぶわれて帰っ
たのでしよう。

お囃子に向かって歩くと、
真つ暗な田んぼの中に一点明

かりが見えました。神社は、
背の高い杉の居久根（いぐ
ね。屋敷の周囲を取り囲むよ
うに植えられた屋敷林）に囲
まれていました。中央には村
の青年会が作ったであろう木
杭による櫓（やぐら）がそび
え、そこから四方八方にろう
そくの入った提灯が流れてい
ました。鳥居の前後には多く
の出店が出て、香ばしい匂い
と煙が立ち込めていました。

田んぼからわき出る力エルの
合唱は、お囃子にかき消され
蚊の攻撃をうちわで追い払い
つつ、老若男女が盆踊りを楽
しんでいました。

後年、村で若い男女の門限
無しは、年に一度の盆踊り
だったことを知りました。若
気の勢いか、正式な盆唄とは
異なる掛け声を張り上げなが
ら、若者たちが嬉々として
踊っていたのを思い出します。

ときに、母の実家の家督で
ある叔父は民謡が上手で、し



ばしば櫓の上で歌い太鼓を叩
く姿を誇らしく見ていました。

今思うと、父と盆踊りに
行った覚えがありません。一
緒に出掛けた母と盆踊り会場
に行った記憶もほとんどあり
ません。

歩いてわずか20分ほどの専
業農家に嫁いだ母ですが、息
抜きできる貴重なひと時だっ
たのだと思います。

●あおた・しげお 1956年
生まれ。福島県相馬市出身。20
16年5月から仙台建設業協会の
専務理事を務める